

目的地にまっすぐでなくても、当初予定の場所でもなくても、さまざまな課題に出合い、時に寄り道しながら、自らの道を探す多様な人々の姿を紹介します。

知ることから始めよう 虐待・孤立のもとにいる 子どもたちの現状



身近なところで起こっていても、外からは見えにくい子どもの虐待、孤立。子どもが「助けて」と言えない、言っても必要な手立てに届きにくいのはなぜだろうか？虐待や家庭環境により親に頼れない子どもたちの支援をする認定NPO法人「3keys（スリーキーズ）」は、まずは現状を知ることから始め、「支援する人たちへの支援を」と呼びかける。

撮影／丸橋ユキ 文／本紙・元木知子

社会の矛盾に気づいて

「コロナ禍で、給付金や協力金などの受給手続きが煩雑だと感じた人は多いと思います」。認定NPO法人「3keys」の代表理事、森山馨恵さんはそう話す。「日本の社会保障制度は今回の給付金や協力金よりもはるかに申請しづらく、制度の周知もこれほどまでにはされていません」

社会的に弱い立場の人は日常的にこのハードルを突き付けられ、余裕がなく制度の利用に至らないと、「使わない方が

悪い」と言われてしまう。

弱者とは、今現在余裕のない人だ。意欲を持って自ら情報を取り、理解し、判断しなければならぬような公的救済では、到底たどり着けない。大人でさえ、ある程度の知識や理解しようとする意欲がないと使いこなせない社会保障制度。子どもや若者には遠い存在だ。

森山さんが虐待や貧困によって頼れる大人が少ない子どもたちと関わり始めたのは大学生のとき。近所の児童養護施設が学習支援のボランティアを募集しているのを知ったのがきっかけだった。そこで出会った子どもたちは中高生でも小学生の勉強ですですつまづいていた。一方、家庭教師や塾講師のアルバイトで出会う子どもたちは、小学生のときから語学を習ったり留学したりしている。あまりの格差にショックを受け、虐待などで保護された子どもたちに勉強を教える学生主体の任意団体「3keys」を立ち上げた。「子どもたちからは、与えてもらうものの方が圧倒的に多かった」と森山さん。大学1年生からビジネスコンテストに参加し、IT関連の企業でインターンとし



▲10代向け駆け込みWebサイト「Mex」。悩んでいる子どもが支援団体を検索し、その場で相談、予約できる。現在、オンラインで相談会を配信

働いた森山さんは、それまですべて自分の努力の成果と思っていたが、そうした環境は家族をはじめ周囲の人たちと与えてもらったものが大きいと気づいた。「周囲に頼れる大人が少ない子どもたちが学ぶ環境を得られるように、全力で関わろう」。森山さんは3keysをNPO法人とし、児童養護施設や母子家庭支援施設で生活する子どもたちの学習を支援する事業を本業に選んだ。

当初、小中高生をすべてサポートし、中高生にはマンツーマンの学習ボランティアを付け、家庭教師のように勉強を教

見えにくい10代の本音

自分の意見を言えないことが多いと森山さんは言う。「親にすら素直に頼つたことがない子どもたちが、学校で分からないと質問するのはとてもハードルが高いのです」

2014年、3keysは子どもの「なやみ相談窓口」を開設。施設入所児童に限らず、虐待、孤立のもとにいる子どもたちに支援を拡大した。さらに16年、10代向けの支援サービス検索・相談サイト「Mex（ミックス）」を立ち上げた。学

